



てらまち学 尼崎ご当地講談  
～尼崎城主 青山幸利から学ぶ尼崎らしさ～

では、早速、尼崎ご当地講談

「尼崎城“人情派”城主・青山幸利」をお聞きいただきましょう。

戦国時代最後の大戦、大坂・夏の陣のあった翌年の元和 2 年に、この講談の主人公・青山幸利が誕生するのでございます。

これが、この時代ではなく、半世紀早く、戦国時代のまん真中に生を受けておりましたら、また違った活躍を見せ、その名を広く後世に残すことになったはずだと想像に難くないのでございますが、残念ながら、少し遅すぎた。

この幸利、平和な世の中では、少し収まりにくい、奔放なキャラクターだったと言えますが、一方で愛らしく、可愛げもあって、さらに、涙もろく、憎めない。まさに、ご当地・尼崎のイメージを体現するような方であったのでございます。

(小拍子木)

「殿、殿。急に足を止められて、何故またジッと、我がお城、尼崎城を、ご覧になっておられるのでございますか？」

「いや、なに、本当に美しい城じゃなあ、と思つてのお」

そう答えたのが、この講談の主人公・青山幸利、その人でございます。

「確かに、美しいお城でございますわね」

と、そう答えたのが幸利の妻・・・でございますが、この幸利の妻の名前は、残念ながらどの歴史的資料にも、記載されておられません。

ただ「賤ヶ岳・七本鎧」の一人・加藤嘉明の長男で、加藤明成の娘だったと言うことだけが伝わってございます。

幸利は、この時代の大名には珍しく、側室を置かなかつたことから、夫婦仲がすこぶる良かったことは想像に難くございません。

しかし、講談の中で、名前が無いと言うのは、話が進めにくくございますので、ここでは、この妻の名前を、尼崎城の別名「琴城」「琴浦城」から一文字いただきま



して、「琴」と言うことにしておきましょう。

普段、妻の琴は江戸詰めでございますが、将軍様から内々に特別の許しを得まして、珍しく尼崎へと戻ってきた。それを機会に、この琴を伴いまして、領中を案内しておりました幸利でございますが、もう目の前が尼崎城と言うところにまで帰ってきたにもかかわらず、そこでわざわざ足を止め、天守閣を仰ぎ見ていたことから、妻の琴が、なぜここで？と問うたのが、先ほどの夫婦の会話でございます。

今一度、幸利は、こう呟きました。

「本当に美しき城じゃのう」

それを受けて、琴もこう答えます。

「確かに！背には六甲の山々が緑に輝き、目の前には青々とした海原が広がります。そして今は夕暮れ。夕日が城を真っ赤に染めまして、実にキレイ・・・って、まあ、あなた！泣いておられるのでございますか？」

「な、なに？泣いてなどおらぬは！ば、ば、馬鹿を申せ！」

「よくおっしゃりますこと。涙が頬っぺたを、ツ、ツ、ツ一っと、ほら、流れておりまする」

「な、な、何を言う！こ、これは・・・これは、ヨダレじゃ！」

「ヨダレ？目からヨダレが出るものですか！そもそも、さきほど昼餉を食べられていたではございませぬか！それも、お蕎麦を二杯も。いえ、三杯でしたかしら。本当にあなたは、お蕎麦がお好きでございますね」

「確かに、尼崎の蕎麦は美味い！昼餉のその蕎麦を思い出して、ツツツとヨダレが・・・」

「って、目からはヨダレは出、ま、せ、ん！それは涙です」

「いや、最近、ちょっとドライアイやから」

と言う会話をしたかどうかは分かりませんが、この幸利に、「青さ」と申しますか「清純さ」がまだ残るのも、無理からぬこととございまして、この尼崎城主になり

ましたのは、まだまだ青年武将と言ってもよい「28歳の時」だったからでございます。

ただ尼崎城の城主と申しましても、明治維新までに、実に合計十二人もおられました。

初代城主は、城作りの名人とも言われ、後に美濃大垣十万石の大大名になりました戸田氏鉄。

二代目が、遠江掛川藩の藩主でありました青山幸成。

どちらも、徳川家を支えてまいりました忠勤の家臣・譜代大名でございました。

すなわち、徳川家は、この尼崎城を重要な拠点と考えていたのですね。

西日本の政治的軍事的支配の拠点となるのは、やはり大坂。その大坂を守るために設置されたのが、大坂の南に位置する岸和田藩と、西に位置するこの尼崎藩とされているのでございます。

言わば、尼崎城は大阪城の「先鋒」たる役割を担っていたのでございます。

二代目城主・幸成が亡くなった後、その地位を継いだのが、幸成の長男でございましたこの青山幸利。

幸利は、城主になったその直後だけにとどまらず、たびたびこの城を眺めては、涙していたようでございます。

八間二尺、今で申します所のおよそ十五メートルの高さを誇る四層四階の天守は、それはそれは美しく、また、大阪城の先鋒と言う大きな役目を担っていると言うその誇らしさに、

思わず涙がこぼれたのでありましょう。

「良き城じゃな。じっくりと見る度に、やはり涙がこぼれるわ」

「確かに。本当に美しき城でございます。そして、殿は、この城を愛され、この地を愛され、そして、この地の民を愛されておられます。家臣たちも申しておりました。殿が折々にお見せになる愛情豊かなお心に触れると、自然に、自然と、涙がこ



みあげてくると」

「そう言うな！そんなことを言われると・・・また涙が流れる」

「殿こそ、そんなことをおっしゃると、私まで泣けてくるではございませんか」

「お前こそ」「殿こそ」と、何とも仲睦まじい、心清らかな二人だったのでございます。

(小拍子木)

万治三年。西暦で申します所の一六六〇年の六月十八日のことでした。幸利は既に不惑を過ぎ、男盛りでございます。

確かにまだ「やんちゃ」な面影は残してはおりますが、一尾崎城主にとどまらず、大坂城を中心に構成されました「西の幕閣」の一員と言った、今で言うところの大 臣級の重責を担う一人でした。

さて、幸利は城下にて親しき町医者の下へ、納涼と称して、数名の者たちと伴に出 掛けておりました。

「さあ、殿、まあ一献」と、その家の主が盃を勧めたその時のことでございます。俄かに空がかき曇り、あつと言う間に空一面を黒い雲が覆います。雨こそ降っては 参りませんが、あっちで稲光、こっちで稲光が光だす。そして、少し遅れて雷鳴が ドドドド〜ンと響く。その稲妻と雷鳴との間隔は次第次第に小さくなりまして、ピ カッと稲妻が光ったその直後にドドドド〜ンとほぼ同時に雷鳴が響く。

ああ、雷雲がすぐそこにまで来た、と思った瞬間でございました。

あたり一面、パッ！と真っ白になりまして、周囲の全てのものが光に飲み込まれる のと同時に、ガラガラガッシャーン・ドドドド〜ンと、耳をつんざくような轟音がいた しまして、その後、耳に残るキーーンと言う音。

その家の者たちはもちろん、幸利の家臣である侍たちも「わあ！」と叫んで、頭を 抱える。中には座布団を頭の上に乗せる者、縁側から外に飛び出す者、そのまま縁 の下に隠れる者もおりますて、もうテンヤワンヤ、ハチャメチャでございます。



幸利の一番そばにいた家臣団一の剛の者が、幸利に尋ねます。

「殿、大丈夫でございますか？」

「うむ」と答える幸利を見て、その家臣が驚いた。

何と幸利、先ほど盃になみなみとつがれた酒を、しっかり飲んでいるではありませんか！

今一度、家臣が聞きます。

「殿、大丈夫でございますか？」

「ちょっと、こぼれた」

「こぼれたって、何がござりますか？」

「酒に決まってるではないか！もったいない」

こんな事態で、酒のことを心配すると言うのは「剛毅」と申し上げればいいのか、・・・何と申し上げればよいのか、言葉に迷うところでございますが、この幸利、相当な儉約家、節約家であったことは間違いございません。

こんなエピソードも伝えられているのでございます。

(小拍子木)

「殿！御恐れながら申し上げます」

「なんじゃ、小納戸役の鈴木か。構わぬ。遠慮なく、申してみよ」

「参勤交代の道中の宿にて、さらに、夜具の中に入られ、間もなくお休みになろうかと言う時に、こんなことを申し上げるのはなんでございますが・・・」

「いや、構わぬ、構わぬ。後は寝るだけじゃ。申してみよ」

「あの～、その～」

「何じゃ、はよ、申してみよ」

「殿、そこで寝はるんですか？」

「当たり前じゃないか。布団の中で寝ずに、どこで寝る」

「その布団のことですが、殿が城主になられてから、まだ・・・」

「まだ・・・、なんじゃ？」

「一度も新調してごさいません。ツギハギだらけでごさいます。あっちも、ツギハギ、こっちもツギハギ。もう、ツギハギなのか、ちょっとお洒落な模様なのか分かりません。

あまりに見苦しいので、お願いでございします。新しいお布団を、何卒、お買い上げ下さいませ！」と言って、鈴木は頭を畳にこすりつけます。

それに対して、幸利は、こう言った！

「ええ～買い替えるの？ボク、この布団でないと、寝られへんねんけど。それに・・・」

「それに、何でございましょうか？」

鈴木は、頭を下げたまま聞きます。

「それに・・・新しい布団を買うのは・・・もったいないやん」

どうも、この「もったいない」が、幸利さんの口癖のようですね。今の世でありましたらこの「もったいない」は世界の共通語で、資源保全、環境保護の観点から礼賛されるべき言葉ではありますが、封建時代真っ只中、殿様がいかに贅を尽くしましても、誰もとやかく言わない時代での「もったいない」発言。小納戸役の鈴木も困ったと思いますよ。さて、どんな顔して、どう答えようかと。

しかし結局、答えは出て来ず、ウ～ンと唸った後、もう一度「は、は～」とだけ言って、頭を畳にこすりつけながら、その場を去るしかなかったのでございしました。

ただし、幸利の儉約、節約は、実は「万一」の時に備えるがため、でございしました。

非常時の際、やはりモノを言うのは「お金」でございします。

さらに、その万一の時に備えて、良き人材を雇い入れるためには、幸利、一切お金に糸目を付けなかったと言うことですから、戦国時代の大名気質が溢れる人物だったのでございましょう。

そして、今、この時こそが、まさに「万一の時」だったのでございします。

(小拍子木)



「殿、雷がどこか近くに落ちたのでございましょうか？」

「うむ。そうに違いない。しかし、あの程度の衝撃であれば、尼崎領内ではなかろう。しかし、嫌な予感がする」と幸利が話した瞬間、また、別な音が聞こえたのでございます。

パチパチパチと、何かが遠くで弾けるような音でございます。

皆が耳をそばだてていると、幸利は、表情を一変させまして、懐に手を入れ、巻紙のようなものを取り出しますと、その一部を切り抜き始めた。

そして、それを、隣りの家臣に渡しますと、

「急ぎ、この名簿にある通りの人員を揃えるのじゃ！」と大音声で叫ぶ。

「殿、これはいかなる指示でございましょうか？」と、その家臣が聞こうとしたその瞬間、今度は、先ほどの音とは比べられないほどの

大音量で、ドカ〜ンと言う音が響く。そして、それは、連続して聞こえてくるではありませんか。

「殿、これは、何が、何が起こったのでございましょうか？」浮足立つ家臣たち。

しかし、幸利は落ち着き払って・・・

「雷は大坂城に落ちたのじゃ。そして、火災が起こった。パチパチパチと言うのは、城が燃える音じゃ。大坂城には、万一の時に備えて大量の火薬が保管されておる。そこに火の粉が注いだとしたら・・・。あのドカ〜ンと言う音は火薬庫が爆発したに違いない。今、渡した切り抜きは、その救助隊の編成案である。急ぎ、城に戻って、人数を集めろ！急ぐのじゃ」

(ちょっと間)

普段、幸利は、少しヤンチャで、何とも憎めない人物であります。ことが起これば驚きの判断力と行動力を発揮します。

音だけで、大坂城の火事を聞き分け、万一の時のためにと書き綴っていた人員表から、最適な人物を選びだし、直ちに、行動に移す。



一方、家来たちも、万一のための訓練は、もう何度も何度も行っておりますし、幸利の目にかなった強者ばかりでございますので瞬時に対応いたします。

早速、その場を引き上げまして、尼崎城へと取って帰る訳でございますが、誰も、歩きはいたしません。皆、走る、走る、走る。

では、幸利はと言いますと、そんな彼らを見送って・・・ということにはなりません。

何なら自分が、一番になるんだと、これまた走る、走る、走る。

いや、ここに来る時には、幸利だけは、馬に乗って来ておりましたので、馬に乗って帰れば一番早いのですが、もう、馬で来たことを忘れていてでございますね。

このへんも幸利らしい。馬のことなど一切忘れて、家臣団たちを横目に、「お前たちには負ける訳にはいかぬ」と走る、走る、走る。

いやいや、家臣たちこそ、主より走るのが遅いと、もう、かっこうがつかみませんので、これまた懸命に、走る、走る、走る。

周囲の町人たちは、それを見て驚いた。

殿様と家臣たちが競い合って、城を目指して駆けているんですからね。

「何事ですか？」「私も、分かりませんねんけど、皆さん、走っておられるので、とりあえず走っておこかと思ひまして」「いや、なんかの特売ちゃいますか？」「噂によりますと、タイガースの残念セールやそうですよ」「来年こそは優勝セールを期待したいもんですな」と、もう街中の住民が走り出した。

それを見た、非番の家臣たちも、家から飛び出してくる。詳細は分からないものの、一大事に他ならないと、たすき掛けをし、帯には、家にあるだけの刀をグググッと差し込みまして、これまた、走る、走る、走る。

その非番の家臣の中に、若井勘右衛門と言う鷹匠の姿もございました。御年・六十歳。そろそろお役を返上しようかと思っておりましたが、まだ、今は現役。その彼も、この事態に気付かしまして、訳は分からないが、とりあえず走らなあかんと家の

外に出てみたものの、どっちに向かって走っていけばよいか分からない。そうこうしているうちに、家臣団の揃って走ってくる姿が見えた。何と先頭を走っているのは幸利公ではありませんか。その姿を見つけて、ああ、ついて行かねばと、走り出しましたが、歳には勝てぬ。足がもつれて、ヨロヨロとよろけた先に、道はない。なんと、数歩、空中を歩いたかと思うと、そのまま、堀にボチャ〜ンと落ちてしまったのでございます。

折り悪く、堀の水は満々と張られておりまして、一方、若井勘右衛門は実に小柄でございませぬ。堀の底に足がつかず、頭は水面の下にある。このままでは息が出来ない。手足をバタバタさせるものの、焦って身体が緊張していることから、いっこうに浮き上がらない。このままでは、溺れ死ぬ。

戦場ではなく、こんな所で死んでしまうのか、ああ、俺の人生、なんとみっともない最期を迎えるのかと思った瞬間でございませぬ。

堀に飛び込んで来た者がいた。

勘右衛門の横にスクッと立ったかと思うと、勘右衛門の襟首をグイとひっぱりあげまして、

あつと言う間に、水面から勘右衛門の顔が出た。

「ああ、息がつげた。助かった！」と、勘右衛門、その助け上げた人物の顔を見やりますと、誰あらん。

城主の青山幸利その人だったのでございませぬ。

「鷹匠が、鷹ではなく、アヒルでも捕まえて、調教をするのか？せめて、カワウにして、鶺鴒になるのはどうだ？」と

幸利は大笑いしたのでございませぬ。

勘右衛門はと申しますと、襟首をつかまれて、まるで、悪さをした子猫のようでありませぬが、幸利の顔を見て、泣き出した。

「家来とは、お殿様の命を守るのが使命。にもかかわらず、殿様にこの命を助けら

れるなど、この世の道理に合いません。言語道断。その手をお放しいただき、この勘右衛門を再び堀に沈めて下さいませ。何卒、何卒、お願いいたします。お手をお放しく下さいませ」

それに対して幸利は、「うむ」と頷いた後、「相分かった」と言い放つと、勘右衛門の襟首を再びグイと持ち、そのままエイッ！とほうり投げたのでございます。

小さな勘右衛門の身体は水面から高く舞上がりまして、今度は堀に落ちることなく、ゴロゴロゴロと堀端へと転がった。

「勘右衛門よ、望み通り、手を離れたぞ。お前も私の大事な家臣の一人、こんなところで死なせるわけが出来ようか。そんなことより、今は一大事。お前も後から来るがよい」と幸利自身も堀から上がると、着物が濡れていることなど一切気にすることなく、尼崎城まで再び駆けていったのでございます。

勘右衛門は、その後ろ姿に手を合わせ

「死に場所は、確かにここではございませんでした。これからもずっと、幸利さまのため奉公し続けさせていただきます」と、泣き崩れたのでございました。

この後、若井勘右衛門は機会あるごとに、この話を同僚・朋輩に、涙ながらに語ったと伝えられているのでございます。

(小拍子木)

その翌日、幸利は、家老の朝比奈藤兵衛以下一〇〇〇人ほどの家臣を連れまして、いち早く大坂城へと向かいます。

やはり前日、大坂城内にある、よりによって火薬庫に雷が落ちまして、その中にあった二万貫以上、現在の単位で申し上げますと実に八十トン以上の火薬が爆発し、火縄も三万本以上が焼失いたしました。

その爆発の威力はすさまじく、二百人近い人々が死傷し、また天守や御殿、櫓など多くの建物が焼け落ち、さらに、城外の一般家屋までが爆風によって倒れたり、屋根が飛んでいったということですのでございます。



こうした事態を、幸利はいち早く予想して対処し、そして行動をしたのでございますね。常日頃から「万一の時」を想定して準備してきたその成果が、見事発揮されたのでございます。

「殿のお見立ての通りでございましたな。素早いご判断により、これほどまでの体制を整えて、やって参りましたのは、現在のところ我が藩だけでございますな」

「そんなことなどどうでもよい。今は心して被害者の発見、救護にあたれ。それが大坂城の先鋒たる我々の勤めじゃ」

そう戒められ、家老の朝比奈藤兵衛も「は、は一」と頭を下げる。

「それにしても、何と言う光景じゃ。多くのものたちが命を失い、家を失った。そこに残された者のことを思うと・・・」と言う声は、途中で途切れていき、被害に会った方々を頭の中で描いているのか、次第次第に涙声になる幸利なのでございました。

(小拍子木)

時は随分と流れまして天和三年・西暦一六八三年の七月四日のことでございます。

「おい、お前！しっかりしろ。」

幸利は長年連れ添った妻・琴の枕元におりました。

二十代もその前半で、この琴を妻に娶ってから、もう四十年以上の歳月が流れております。

誰もが認めるおしどり夫婦でございましたが、そんな二人にも、別れの時が近づいているようでございました。

「おい。俺より先に逝く奴があるか。俺より先に逝くことは許さん。まだまだ二人でやり残したこともあるではないか」

「そうかしら。もう、十分。私には、楽しい思い出がいっぱいです。大坂城は結局、二度落雷に合ったそうですが、その都度あなたは一番に駆けつけられたそうではありませんか。頼もしい旦那さまでございます。しかし、お江戸での火事の際は、

私、肝を冷やしましたわ」

「明暦の火事の時か？」

「そうそう、あの火事では、畏れ多くも江戸城の本丸御殿も焼け落ちました。その際も、江戸に詰めていた貴方は、まずは、私めを安全な場所へと避難させた後、そのまま、江戸城へと一番に駆けつけ、何と桜田門から乗り込んだと言うではありませんか？門番の方が、『本丸も落ち、我らが主・将軍様も避難している非常事態のさなか、何人であっても許可なく、ここを通すことは許さん！』と立ちはだかったところ、貴方は何とおっしゃったか、覚えておいでですか？」

「ワシが・・・さて、何と言ったやら」

「『ワシを誰と心得る。青山幸利ぞ！通る！』って。門番の方は、貴方なぞ、知りませんわよ。あとで将軍様よりお咎めがあるかと思い、私、内心、ひやひやしておりましたわ」

「何を言う。結局、お咎めどころか、お褒めの言葉を頂戴したでわないか」

「はいはい。そうでしたわね。でも、そのお褒めの言葉を頂戴するまでは、貴方も、やり過ぎたかな、叱られるかな、どうしようかとオロオロ、オロオロ。貴方は、たいそう強いふりをされてこられましたけど、実は、そうではない一面もお持ちでございます。そして心配性な人でしたわね。万一の時に備えよ、と言う掛け声は、貴方が心配性な故に出て来たものに他なりません。貴方は繊細だからこそ、数多くのお手柄を立てられたのでしょね」

「ああ、お前にかかれば、なんでもお見通しだ。ただ、ワシは、まずお前に褒められたかった。お前に褒められたいと思ったからこそここまで頑張って来られたのじゃ。だから、お前がそばにいてくれねばならぬ。死ぬな！ワシより先に死ぬな。お前には、まだしてやらねばならないことが山ほどあるんだ」

「もうそれだけで十分。そうおっしゃって下さるだけで十分です。私がいなくなった後は、家臣の皆さんの言うことをよく聞いて、お布団も時々は新調してもらおうの

ですよ。もう乱暴な振舞いは出来ないでしょうが、乱暴な口のきき方なども、してはダメですよ」

「ああ、分かっている。だから、まだ逝かんでくれ。お前がいないと、ワシは・・・ワシは・・・毎日泣いて暮らすぞ」

「はい、はい。後は、気楽に暮らして下さいませよ。ただね」

「ただ、なんだ？」

「貴方が戦国の時代に生きておられたら、果たしてどんな活躍をされたのか、私、見てみたかったわ」

妻の目からも、一筋の涙がこぼれますと、もう、いけません。

妻・お琴のかたわらで、ワンワンと子どものように声を枯らしながら泣く幸利だったのでございます。

(間)

さて、その幸利も、妻を亡くしたちょうど一年後に、天へと召されるのでございます。

本当に仲が良かったのでしょうかね。享年六十九歳。

その最期も尼崎城にて迎えております。

世の中が「武張った」時代から、「安寧」の時代に移り変わっていくタイミングで、実に四十一年も尼崎城主を務めたのでございました。

歴史に「もし」はありませんが、違う時代に彼が生きていたのなら、果たしてどんな活躍を見せたのか、やはり想像してしまうのでございます。

いえ、たとえ、どの時代に生きていたとしましても、彼を慕う人々は大勢いたに違いありません。地元を愛し、住民を愛し、部下を愛し、家族を愛し、さらに、布団のように日常に使うモノにまで愛情を注ぐ。何とも愛すべき人物で、頼りになるリーダー。そんな幸利が、ここ尼崎におきまして、さらに活躍するそんなお話をまだまだ紹介させていただきたいのでございますが・・・ここでお時間が来たようで

ございます。

この続きは、またの機会にお譲りするといたしまして、この尼崎ご当地講談「尼崎の誇り！尼崎城“人情派”城主・青山幸利」、本日のところは、読み終わりとさせていただきますのでございます。

本当に、ありがとうございました。



発行 てらまちプロジェクト協議会  
尼崎信用金庫+阪神電気鉄道株式会社  
制作 大谷邦郎（グッドニュース情報発信塾）  
企画 株式会社いきいきライフ阪急阪神